

月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊27年目
創刊1989年 Nr.313

2015年7月号



“Zwirnverkäuferin”, Kaufruf,
Kaiserliche Manufaktur, Wien, um 1760
Privatsammlung, Wien
Porzellanmuseum im Augarten



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 46



五月一八〜二〇日にかけて、日本機械学会、米国機械学会及び中国原子力学会の主催により第三回原子力工学国際会議が幕張メッセで開催された。本会議は、企業、政府、学术界の多くの専門家の貢献により開催される最高の世界会議であり、世界の最新技術と原子力発電の現状に焦点を当て、日米欧中持ち回りではほぼ毎年開催されている。我が国での開催は、一九九二年の東京、九五年度の京都、一九九年と二〇〇三年の東京、〇七年の名古屋、二年の大阪に続いて今回が七回目である。我が国の原子力の再稼働は遅れているものの、世界的には原子力が信頼を取り戻しつつあることから、今回の会議は「原子力・信頼できるグローバル・エネルギー」の副題が付けられた。我が国の産業界、研究所、大学等から約四四〇名を筆頭に、中国から二百名以上を

始め、世界三十ヶ国から計九百人以上の参加があった。筆者は二百目の「超設計基準・福島事故後の重要なシビアアクシデント研究開発課題」と題するパネルセッションで議長を務めた。事前にパネリストとメールで情報交換することにより、効果的に議論を進めるとと



もに、フロアから適切なコメントをもらうことができ、幸いにも議論が盛り上がったと思う。この他、三日目には共同研究者に研究成果を発表してもらうとともに、二つのセッションで座長を務めた。また、若手の研究者の発表に対して質問やコメントをして議論の活性化に少しは貢献したと思う。原子力研究開発機構の昔の研究室にいた五名の研究者、うち三名には約二十数年ぶりに会えたのが嬉しい出来事であった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の動物園について述べてみたい。ウィーンのシェーンブルン宮殿内にあるシェーンブルン動物園は、マリア・テレジア時代の二七五二年に開園した世界最古の動物園である。二〇〇七年には動物園では世界で初めて自然交配によりパンダの赤ちゃんが誕生し、一〇年には二匹目、一三年には三匹目のパンダの赤ちゃんが誕生している。この動物園は最先端の施設を完備し、世界で最も近代的で理想的な動物園のひとつとして知られている。五百種以上八千点超のバラエティ豊かな動物が自然に近い環境で生活している。これまでに三回国際比較で欧州最良の動物園と評価され、毎年二百万人以上の訪問者がある。

一方、岡崎公園内にある京都市動物園は、一九〇三年に開園した我が国で二番目の歴史がある。また、市民から多額の寄付金が寄せられ、初めて市民の手によって創設された動物園でもある。我が国で初めてのライオンやトラ、クロエリハクチョウの誕生、シシオザルの自然繁殖、ニシゴリラの三世代に渡る繁殖を始め、希少な野生動物の繁殖で実績をあげてきた。京都大学と連携して、野生動物研究センターを運営し、野生動物の保護や研究を行っている。一八〇種類余り、七百点以上の動物がここで生活している。平成二五年度には八〇万人以上の入園者があった。両市の動物園は長い歴史を有しながら時代の最先端を開拓するとともに、市民から愛されていることが共通している。余談であるが、筆者はウィーン赴任中、シェーンブルン動物園を二回訪問する機会があった。広大な敷地とパンダが印象的だった。京都市動物園は学生時代には無縁だったが、今年五月の連休に孫と一緒に初めて訪れて楽しんだ。両市の動物園を紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部撮影をお願いしたシェーンブルン動物園の写真を掲載させていたたく。

■杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■

